

今週の為替相場見通し(2016年8月8日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		100.68 ~ 102.83	101.82	100.50 ~ 103.80
ユーロ	(ドル)		1.1046 ~ 1.1234	1.1090	1.0900 ~ 1.1200
(1ユーロ=)	(円)		112.32 ~ 114.80	112.85	111.50 ~ 114.50
英ポンド	(ドル)		1.3021 ~ 1.3372	1.3069	1.2850 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	132.25 ~ 136.27	133.06	130.00 ~ 134.50
豪ドル	(ドル)		0.7486 ~ 0.7665	0.7615	0.7450 ~ 0.7750
(1豪ドル=)	(円)	*	76.50 ~ 78.19	77.58	76.00 ~ 79.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 和地 淳史

(1)今週の予想レンジ: 100.50 ~ 103.80 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

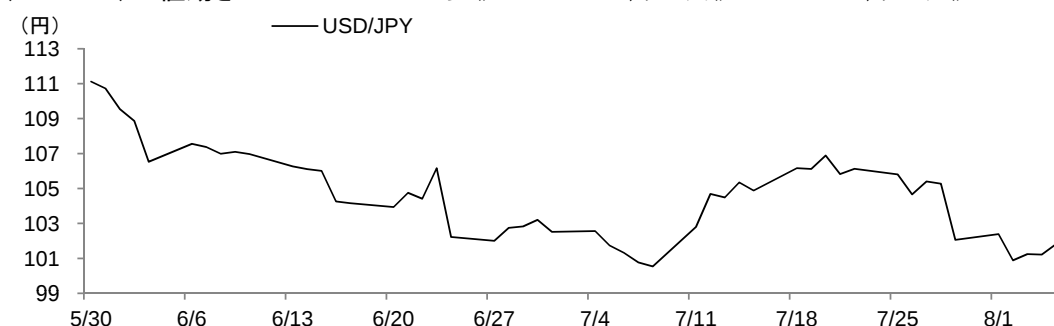
先週のドル/円相場は、100円台後半まで下落する場面も見られたが、米7月雇用統計の良好な結果を受けて反発する展開となった。日銀が追加緩和を決定した後も円高が進む中、週初1日のドル/円は102円台前半でオープン。日経平均の反発を受けて102円台後半まで反発する場面が見られたが、米7月ISM製造業景気指数が市場予想を若干下回ったことで再び102円台前半での動き。2日、麻生財務相が円高をけん制する発言をしたことでドル/円は週高値となる102.83円まで反発したが、その後は日本政府が発表した経済対策が概ね事前に報じられていた通りの内容であったことが確認されると、材料出尽くし感から101円台前半まで日経平均とともに急落した。更に、海外時間も株価が軟調に推移する中、米金利も低下する動きを見せたことでドル/円は一時週安値となる100.68円まで続落。しかし、100円台では押し目買いの動きが見られたことに加えて、3日には株価が底堅く推移したため、ドル/円は101円台を回復。4日も、再び100円台後半まで売られる場面が見られたものの、日経平均の急反発や100円台での根強い押し目買いや、岩田日銀副総裁の緩和の程度は緩めないとの発言を受けて、101円台後半まですぐに反発。注目された英中銀(BOE)の金融政策発表では市場予想を上回る追加緩和策が発表されたが、米金利が欧州金利とともに低下する一方、欧州以外の株価は上値重い展開が続いたことで、ドル/円も101円付近で上値重く推移。しかし、注目された5日の米7月雇用統計において、市場の予想を上回る雇用者数の大幅な伸びと賃金の上昇を示す内容となったため、ドル/円は一時102円台まで反発した。その後は小幅に売り戻され、101.82円で越週した。

今週のドル/円相場は、底堅い展開を予想。米7月雇用統計の市場予想を上回る良好な結果を受けて、米年内利上げ期待が再び高まりつつある状況。米債への押し目買いの動きは限定的となる中、ドルインデックスは200日移動平均線の上抜けを狙える水準にあることを考えると、短期的にはドル買いの動きが強まる可能性が高いか。各国の金融緩和にも関わらず株価の上値が重い状況は気にかかるが、ボラティリティは低下して夏枯れ相場が意識される中、今週は12日(金)の米7月小売売上高まで市場を大きく変動させるような経済指標は予定されていないため、基本的には米7月雇用統計後の流れを引き継いでドル/円は底堅く推移しよう。また、仮に再び円買いが強まる場合にも、先週の100円台での根強い押し目買いに鑑みれば、短期的には100円を割り込むことは難しいと予想。

(3)先週末までの相場の推移

先週(8/1~8/5)の値動き:

安値 100.68 円 高値 102.83 円 終値 101.82 円



2. ユーロ

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1200 111.50 ~ 114.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

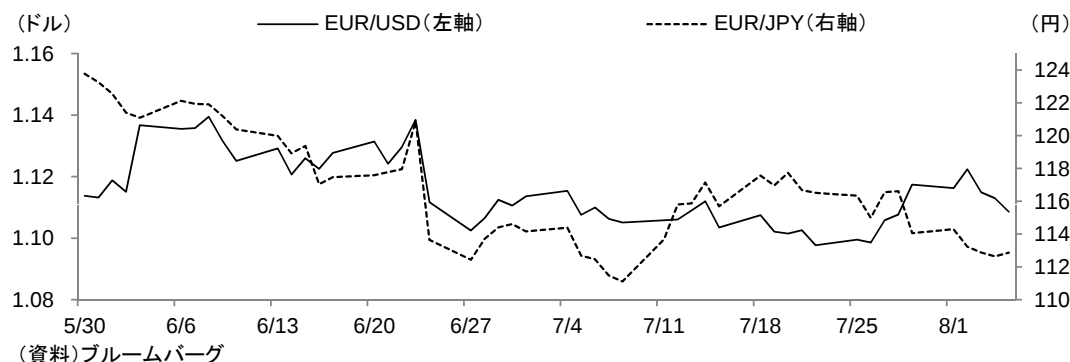
先週のユーロ相場は週後半に下落する展開。週初1日、1.11台後半でオープンしたユーロ/ドルは、終始1.11台後半で底堅く推移。2日は、米7月PCEコアデフレーターの結果がさほど強いものとならず、米利上げ期待も盛り上がらなかったことから、ドル売り優勢の中、ユーロ/ドルは一時週高値1.1234まで上昇した。しかし、積極的なユーロ買い材料があるわけでもなく、直ぐに軟調な地合いとなる。3日には好調な米経済指標を受けてドル買い優勢地合いとなると、ユーロ/ドルは1.11台前半まで下落。翌4日にはBOEの市場予想を上回る緩和策を受けて英ポンド売りが強まると、ユーロ/ドルも一時1.1114まで連れ安となった。5日は米7月雇用統計で好調な結果が示されると、ユーロ/ドルは週安値1.1046をつけ、その後はやや買い戻された後、1.10台後半で越週した。一方、対円は週初1日に114円台前半でオープンし、その後は小動きで推移。2日は本邦経済対策への材料出尽くし感からドル/円が下落する展開に、ユーロ/円も連れ安となり、一時113.05円をつける。翌3日は、米経済指標が好調な結果を示したことでユーロ/ドルが下落すると、ユーロ/円も112円台後半で上値重く推移。4日はBOEから追加緩和策が発表されるも、ユーロ/円への反応は限定的で112円台後半でレンジ推移となる。5日は米7月雇用統計を受けて、ユーロ/ドルが急落する動きにユーロ/円も週安値112.32円をつけ、その後も上値は重く112円台後半で越週した。

今週のユーロ相場は小幅なレンジ内推移を予想する。先週はBOEが追加利下げに踏み切ったほか、米7月雇用統計が好調な結果を示したことでドル全面高の展開となり、足許、ユーロ/ドルは1.10台後半で推移している。一方、欧州圏での相場材料は乏しく、7月末に発表されたストレステストの結果ではイタリアの大手銀行の懸念が強まり、ユーロ/ドルは一時的には下落を見せたものの、トレンドが出るほどの材料には至っていない。加えて、ボラティリティ市場においてもユーロ/ドルの期間1か月のボラティリティは年初来安値水準を更新し、足許6%台後半まで下落するなど、相場の落ち着きが予想されている。実際、先週の米7月雇用統計の発表を終え、8月25日から開催されるジャクソンホール経済シンポジウムまでは特段大きな材料は見られない。今週は本邦で夏季休暇入りする企業も多く、目立った経済指標の発表もないことから、ユーロ相場は、動きの乏しい夏枯れの1週間となろう。主な経済指標は8日(月)に独6月鉱工業生産指数、12日(金)に独4~6月期GDP(速報)、ユーロ圏4~6月期GDP(改定値)が予定されているが、相場の反応は限定的になると予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/1~8/5)の値動き:

(対ドル)	安値	1.1046	高値	1.1234	終値	1.1090
(対円)	安値	112.32	高値	114.80	終値	112.85



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2850 ~ 1.3200 130.00 ~ 134.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

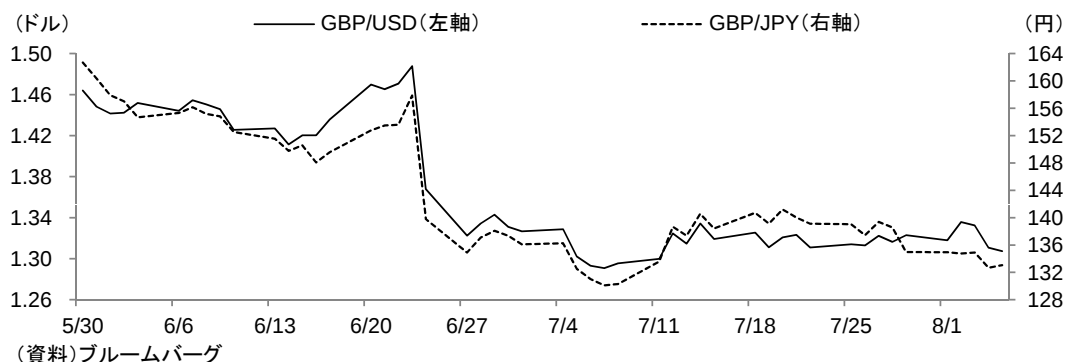
先週の英ポンド相場は、対ドル、対ユーロでは上振れ先行後、反落。対円では軟調気味の横ばいから下押し。対ユーロでの下げ幅は小幅にとどまったものの、週を振り返って対主要通貨で全面安となった。2日のポンド上振れは、円高主導のドル全面安の副産物と言えた。円高進行の背景は、同日発表された日本の経済対策や先月29日の日銀金融政策決定会合などを経て、「材料出尽くし感」による円買い戻しと解釈されたが、日銀の追加緩和はともかく、経済対策で何が期待された結果円が売られ、何が足りなくて円が買い戻されたかははっきりしなかった。それ以上にはっきりしなかったのは、ポンドが円に連れて対ドルや対ユーロではむしろ切り上がった値動きの背景。前後して、日英の長期金利は揃って上昇していたが、仮に財政の悪化や物価の上振れに対する懸念が長期金利を押し上げていたとしたら、それを理由に通貨が買い上げられるというもおかしな値動きと感じられた。その後ポンド相場の関心は4日の英中銀金融政策委員会の結果発表に移っていった。果たして、同委員会は基準金利の引き下げ(0.50%→0.25%)、国債購入額上限の拡大(3750億ポンド→4350億ポンド)、新規に最大100億ポンドの社債購入、期間貸出スキーム(最大1000億ポンド)の新設と、包括的な金融緩和を発表。市場の予想以上に踏み込んだ緩和パッケージと評価された。一連の緩和策を受けてポンドは全面急落。更に対ドルでは、5日発表の米7月雇用統計の堅調を受け、週引けに掛けてもう一段水準を切り下げた。

今週の英ポンド相場は、軟調推移継続を予想。通貨市場は英中銀の踏み込んだ金融緩和を受けて素直にポンドを売り込んだ。英中銀は今回発表した緩和策はいずれも追加緩和が可能と明言しており、年内の追加緩和も示唆している(「金融政策委員会の過半は年末の基準金利をゼロ近傍と予想している」)。英中銀がこれだけ追加緩和に構えている環境で、調整的な反発以上のポンド高を見込むのは難しい。また、先週は長期金利上昇がポンド買いの一因になったが、堅調な米7月雇用統計を受けて米長期金利が急伸しているは、逆に目先のドル買い要因と読める。英経済指標では、英のEU離脱投票で、英経常赤字ファイナンスの持続性に懸念が広がる中、9日(火)の英6月貿易収支が興味深い。また、EU離脱投票の英住宅市況への影響は、巷間盛んに聞かれる値下がりがあるがこれまでのところ住宅価格指標などに顕在化していないが、10日(水)の王立不動産鑑定士協会(RICS)の7月住宅価格にその兆候が読み取れるかどうかにも興味深い。他に9日(火)には英6月鉱工業・製造業生産も発表される。中期的には、英中銀金融緩和の「出尽くし感」の広がりポンドの重石になる可能性も警戒される。英中銀カーニー総裁は、4日のインフレ報告書記者会見で「マイナス金利を導入するつもりはない」と明言しているが、それは利下げ余地が0.25%しか残っていない可能性を意味する。一方で、インフレ報告書は、中期的には「不透明感」を、中期的には「英経済が(EU加盟国である)現在よりもいくらか(somewhat)開放的でなくなることを前提に作成された」というが、ここまで漠然とした前提で作成された経済予想が、今後始まるはずのEUやその他諸国との通商交渉などで実態から大きく乖離する可能性は十分に考えられる。長丁場が予想される交渉がこじれ、仮に英景気が予想よりも大幅に下振れした場合、「打つ手が残ってない」事態に陥る可能性を、市場が遠からぬ将来問題視する可能性も除外できないのではないか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/1~8/5)の値動き:

	(対ドル) 安値 1.3021	高値 1.3372	終値 1.3069
(対円)	安値 132.25	高値 136.27	終値 133.06



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 0.7450 ~ 0.7750 76.00 ~ 79.00 円

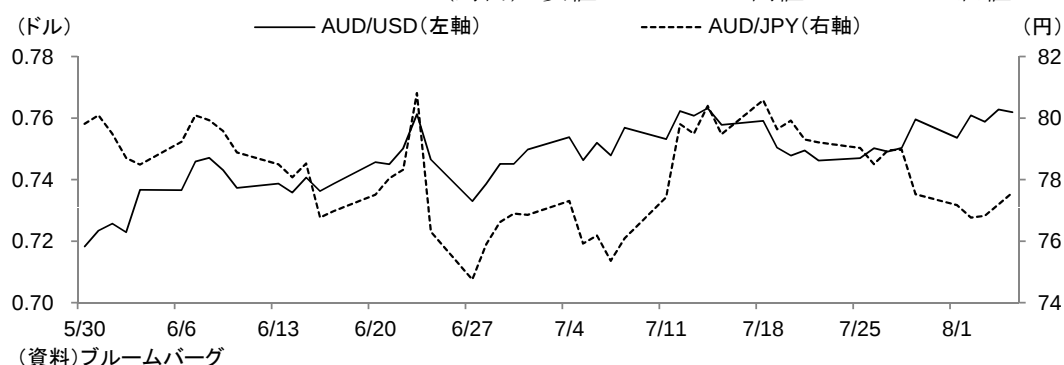
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、対ドルは週前半に下落するも、豪州準備銀行(RBA)による政策金利発表後に上昇。その後、米7月雇用統計の結果を受けて反落。対円についても週前半は軟調推移したが、週後半にかけてはじり高となり、その後、米7月雇用統計後は揉み合い推移となった。週初1日、0.76ちょうど近辺でスタートした豪ドル/ドルは、事前予想とほぼ同値となった中国7月製造業/非製造業PMIに対する反応は限定的。しかし、翌日に、利下げ予想の強いRBA政策金利発表を前にして市場の警戒感強く、徐々に売り優勢となると0.75台前半まで下落した。その間、豪ドル/円は、ドル/円の上値の重さも相俟って78円近辺から77円近辺まで下落した。2日、豪6月貿易収支は市場予想比赤字幅が大きかったものの特段反応なく、0.75台前半でRBA政策金利発表を迎えた。RBAは大方の市場予想通りとなる25bpの利下げ(1.75%→1.50%)を発表、豪ドル/ドルは一時、0.75ちょうどを割り0.7486まで下落。もっとも、同程度の利下げは既に相場に織り込まれていたことから、豪ドルは間もなく反発すると0.75台半ばまでショートカバーが進み、0.76ちょうど手前では短期のストップロスを巻き込みながら0.7638まで上伸、その後はやや利益確定の売りに押され0.76を挟んでの揉み合いとなった。4日、豪6月小売売上高は事前予想比弱い結果となったが豪ドルの反応は限定的。同日欧州時間、英中銀(BOE)が追加緩和策を発表後にポンドが急落すると、欧州通貨に対してオセアニア通貨が強含む流れに豪ドル/ドルは直近高値を抜け、一時0.7663まで上昇、豪ドル/円は77円台なかばまで底堅く推移した。5日発表の米7月雇用統計は、非農業部門雇用者数変化、平均時給ともに市場予想を上回ったことからドル買いの流れとなり、豪ドルは一時、0.7598まで下落するも、ドル買い一巡後はやや値を戻し、0.76台前半で越週した。その間、豪ドル/円は豪ドル/ドルが下落する一方でドル/円が上昇したため、77円台半ばでの揉み合いとなった。

今週の豪ドル相場は、対ドル、対円ともに比較的狭いレンジ内での推移を予想する。今週は豪経済指標に目立ったものはなく、米国では7月生産者物価指数、7月小売売上高、中国では7月貿易収支、7月消費者物価指数(CPI)、7月鉱工業生産などが発表される。しかしながら、米国については最重視される雇用統計を通過しており、中国についても景気後退を懸念する声は高まっていないことから、個別の経済指標の強弱についての豪ドルの反応は限定的となろう。良好な数字となった米7月雇用統計を経てもなお、米利上げ観測が高まっているとは言い難く、足許のドルの上値の重さや、金融緩和継続に根差した株式相場の底堅さが豪ドルのサポートとなりそう。一方で、年初より反発・上昇基調にあった原油先物相場が6月に1バレル50ドル超を付けた後、40ドル近辺まで反落しており、さらに下落基調が鮮明になるようであれば、リスク選好度が低下し、豪ドル/ドル、豪ドル/円の上値を抑える要因となろう。いずれにせよ、今週については手掛かり材料に乏しく、夏季休暇に入った市場関係者も多いことから、方向感に欠けるレンジ内推移を予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/1~8/5)の値動き: (対ドル) 安値 0.7486 高値 0.7665 終値 0.7615
(対円) 安値 76.50 高値 78.19 終値 77.58



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。